

8月24日(土) 研究発表第2室(教養部E204)

言語能力の統語的発達過程

—T-unit によって、英文を書く能力の発達を測る—

Syntactic Development of English Writing Ability

名古屋女子大学 佐藤恵子

T-unitは第一言語の統語的発達のみならず、第二言語のそれを測るのにも信頼にたる客観的尺度として、平野(1990)、富田(1990)等で検証されている。

言語能力の発達過程にあつては、核文の「拡大」と「縮小」という逆の方策をとってフィードバックしながら大人の能力に近付いていく。特に初期・中期の段階では、一発話の中により多くの情報を盛り込む「拡大」の方策が学習されていく。

本研究は「拡大」に焦点をあて、日本人学生(中学生から大学生まで)の英文を書く能力をT-unitを中心とする尺度で測り、英語を自国語とする者の言語発達過程と比較・考察しようとするものである。

目的

具体的な目的として次の4項目をたてた。

- 1) 中学生、高校生、大学生各レベルでの、核文を結合してより長い文に拡大する能力を測り、英文を構成するとき利用できる統語能力の発達をみること。
- 2) 各レベルでの文拡大に利用された文法項目の使用頻度から、構文力発達過程と習得順序をみること。
- 3) 英語を自国語とする学習者や文学者、英語を外国語として学ぶ日本人学生、それぞれの言語能力発達過程を比較し、相違点の原因を考察すること。
- 4) 文結合や修飾関係に焦点を置いた作文教育によって、文構成能力を伸ばす可能性をさぐること。

方法

データを得るため、次の2種の指示を与えた。

- 1) 不自然なほど短く切られている文からなっている物語があります。自由に文を結合して、最も自然だとあなたが思うように書き換えなさい。
- 2) 次の5つの題の中から1つ選んで、考えることを英語で書きなさい。

The Importance of English

How to Learn English

Communication Gap

My Hobby

My School Life

結合問題は比較の便利のために、Hunt(1965)で用いられた物語を使用した。自由英作文の題は、学生の能力と書き安さを考慮し、担当の高校の先生の提案をいれて、後の2題を加えた。やはり、その加えた題を選んだ者がほとんどであった。

8月24日(出) 研究発表第2室(教養部E204)

被験者

はじめは、発達をはつきりと分析できるように、3学年毎に被験者を選び、次にレベルを等しくするために、同じ学校で各学年1クラスを選んだ。

- | | | |
|----------|-----|-----------------|
| 1) 中学3年生 | 30名 | 名古屋 YMCA 中3上クラス |
| 高校3年生 | 30名 | 愛知県立千種高校 |
| 大学3年生 | 30名 | 南山大学英文科 |
| 2) 高校1年生 | 45名 | |
| 2年生 | 45名 | 愛知県立西尾東高校 |
| 3年生 | 45名 | |

分析の方法

誤りについては厳密に扱わなかった。意味の読み取れない語群のみ排除し、屈折、一致、冠詞等の誤り、目的語の代名詞の欠如、複数表示の欠如等、日本人学生のよくおかす誤りは問題にしない方針をとった。英語を自国語とする成熟した大人の書く英文の長さに近づくために、日本人学習者がとる統語的発達に焦点を絞ったからである。それ故に、長さと複雑度を織り込んだ T-unit を測定の尺度の中心に置くことに決めた。

結果と比較

Comparison of Five Factors of Native Speakers and Japanese

- A---Mean Length of Clauses
 B---Ratio of Clauses per T-unit
 C---Mean Length of T-units
 D---Ratio of T-units per Sentence
 E---Mean Length of Sentences

Native Speakers	A	B	C	D	E
Faulkner	12.94	1.75	22.62	1.50	33.85
Hemingway	8.68	1.17	9.41	1.08	10.70
Hunt	11.16	1.73	19.27	1.00	19.27
Hayakawa	8.96	1.44	12.88	1.60	20.60
Superior Adults	11.50	1.76	20.30	1.23	24.70
Grade 12: A	8.60	1.68	14.40	1.17	16.90
Grade 8: A	8.10	1.42	11.50	1.37	15.90
Grade 4: A	6.60	1.30	8.60	1.60	13.50
Japanese Learners					
A Graduate	11.32	1.73	19.55	1.00	19.55
Sophomores	7.82	1.41	11.00	1.20	13.19
Grade 12: J	7.09	1.32	9.36	1.36	12.76
Grade 11: J	6.73	1.31	8.81	1.21	10.66
Grade 10: J	6.66	1.10	7.33	1.06	7.74

8月24日(土) 研究発表第2室(教養部E204)

文の拡大と複雑度の関係

文を長くするために、どんな文法事項を使用するか。

複文の使用頻度(1) 生起数

Combining Task から(意図的な拡大作業)

	中3	高3	大3	計
名詞節	46 (48%)	63 (31%)	68 (45%)	177 (40%)
形容詞節	1 (1%)	55 (28%)	17 (11%)	73 (16%)
副詞節	49 (51%)	83 (41%)	65 (44%)	197 (44%)
複文Total	96 (100%)	201 (100%)	150 (100%)	447 (100%)

複文の使用頻度(2) 平均使用数

Combining Task から(意図的な拡大作業)

	高1	高2	高3	平均
名詞節	1.69	2.04	2.26	2.00
形容詞節	1.07	1.52	2.00	1.53
副詞節	1.78	2.13	2.00	1.97
複文Total	4.53	5.70	6.26	5.50

複文の使用頻度(3) 平均使用数

Free Composition から(文構造に対する注意不足)

	高1	高2	高3	平均
名詞節	0.58	2.81	1.54	1.64
形容詞節	0.22	0.49	0.73	0.48
副詞節	1.27	2.19	2.20	1.89
複文Total	2.07	5.49	4.47	4.01

T-unit の長さ別 使用率

	中3	高3	大3	平均
"short" T-unit (2語~8語)	68.0%	45.0%	51.5%	54.8%
"middle-length" T-unit (9 ~ 20)	31.5%	51.0%	46.0%	42.8%
"long" T-unit (21 ~ 39)	0.5%	4.0%	2.5%	2.4%
Total	100%	100%	100%	100%

8月24日(土) 研究発表第2室(教養部E204)

結論

- 1) 中学生から高校生にかけての期間の文拡大能力の発達はめざましい。
(7.35words--10.22words per T-unit) しかし、高校生から大学生にかけては、少なくとも長さに関しては特に発達はみられない。
- 2) 複文の使用頻度は、どのレベルでも副詞節、名詞節、形容詞節の順に習得されるようだ。特に形容詞(句)(節)を用いて文を長く、かつ豊かにする方法の修得が遅れている。
- 3) 文章を書くことに優れた、英語を自国語とする成人の文の平均的長さから考えて、EFL学習者の目標とする文の長さの平均は、20--25語であろう。日本の高校一年生は、T-unitに対する節含有率ではアメリカの小学四年生にやっと匹敵し、T-unitの平均の長さでは少々及ばず、文の長さでは遥かに及ばない。
- 4) 文結合と自由作文とでは、得られた結果に大きな開きがあった。意識を喚起すれば、結合作業の潜在能力を引き出せる証拠であろう。
実際に多節構造を作る練習を課することによって、どれだけの伸びが得られるかを検証することは、残された課題である。

主な参考文献

- Gaies, S. (1980). "T-unit Analysis in Second Language Research: Applications, Problems, and Limitations" TESOL Quarterly, 14(1), 53-60.
- Hirano, K. (1989). "Research on T-unit Measures in ESL" 『上越教育大学研究紀要』 8, 67-77.
- 平野絹枝(1990). 「言語能力の客観的指標の妥当性—日本人EFL大学生の場合—」 『上越教育大学研究紀要』 9, 65-77.
- 平野絹枝(1990). 「言語能力の客観的指標の妥当性—作文時間と談話タイプの影響—」 第29回JACET大会研究発表資料.
- Mellon, J. C. (1969). Transformational Sentence-Combining. NCTE, Urbana, Illinois.
- Hunt, K. (1965). Grammatical Structures written at three grade levels. NCTE, Urbana Illinois.
- Hunt, K. (1974). "Measuring Sentence Development." JACET 紀要 5.
- Hunt, K. (1980). "Teaching Syntactic Maturity." Language Acquisition. 英潮社.
- Hunt, K. (1970). "How Little Sentences Grow into Big Ones" 小川洋通訳(1972). 「小さな文はどのようにして大きな文になるか」 『応用変形文法』, 大修館書店.
- Hunt, K. (1970). "Recent Measures in Syntactic Development" 美尾浩子訳(1972). 「統語発達を測る最近の尺度」 『応用変形文法』, 大修館書店.
- 冨田裕一(1990). 「T-unitを用いた高校生の自由英作文能力の測定—総合的英語能力との関連」 Step Bulletin 2, 14-27.